

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 講演録 奄美諸島編年史料編纂の成果と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 英一, Ishigami, Eichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000973">https://doi.org/10.57529/00000973</a>

## 奄美諸島編年史料編纂の成果と課題

石上 英一

## 要旨

本稿は二〇一九年六月一五日の国史学会での講演に基づく。対外関係史研究には対象の国・地域に赴くことが必要との鈴木靖民氏の訓えを得て、一九八八年に小林敏男氏の紹介で鹿児島短期大学付属南日本文化研究所の奄美諸島学術調査に参加し、奄美諸島史研究を始めた。奄美諸島学術調査参加の成果は「奄美群島編年史料集稿」として発表した。一九九四～九七年度に「沖縄の歴史情報研究」に参加し、奄美諸島関係の琉球家譜・中山王詔書等の調査も進めた。鹿児島県歴史資料センター黎明館の二〇〇二～四年度の「奄美群島歴史資料調査事業」（鹿児島大学附属図書館データベース公開）により奄美諸島史料調査が展開した。筆者は、文化庁の歴史文化基本構想による「宇検村・伊仙町・奄美市文化財総合的把握事業」（二〇〇八～一〇年度）に参加して「奄美遺産」の提言に関わり、喜界町の城久遺跡群調査指導委員会（二〇〇六～一四年度）、奄美市の赤木名城保存管理計画策定委員会（二〇一三～一四年度）にも参加した。史料蒐集と文化財保存活用事業参加経験を基に「城久遺跡群の歴史的評価の前提―日本古代・中世前期並行期喜界島編年史料集稿」（『城久遺跡群 総括報告書』、二〇一五年）、「奄美諸島編年史料 古琉球期編」（上・下、二〇一四・一八年）、「奄美群島編年史料集稿 寛永年間編」（『東京大学史料編纂所研究紀要』一七号、二〇〇七年）を編纂した。

【キーワード】奄美諸島編年史料 奄美群島歴史資料調査事業 奄美遺産 宇検村・伊仙町・奄美市文化財総合的把握事業 城久遺跡群

奄美諸島（行政地名及び国土地理院地図の地名は奄美群島）は、吐噶喇列島と琉球諸島の間に位置し、北から、喜界島、大島（奄美大島）、加計呂麻島、与路島、請島、徳之島、沖永良部島、与論島により構成され、鹿児島県に属し、喜界町、大島の奄美市・龍郷町・大和村・宇検村、大島南西部と加計呂麻島・与路島・請島の瀬戸内町、徳之島の徳之島町・天城町・伊仙町、沖永良部島の和泊町・知名町、与論島の与論町の十二市町村よりなる。本稿では、大島、加計呂麻島、与路島、請島を併せて、大島（奄美大島）と称する場合がある。

十・十一世紀頃から九州より奄美諸島を経由して琉球諸島まで及んだ日本の古代文化が、琉球のグスク時代成立の基盤の一つとなり、また琉球勢力の北上により十五世紀には大島・喜界島までが琉球国の版図となり一六〇九年三月まで琉球国統治下にあった事実は、奄美諸島の基層文化の一つとして琉球文化があり、一六〇九年以降も奄美諸島では鹿児島藩により琉球習俗が強制される場合もあつたため古琉球文化の伝存が見られるなど、奄美諸島は広義の琉球文化圏に含まれると見ることもできる。同時に、奄美諸島における日本文化と琉球文化の影響の差異により、奄美諸島の北部（喜界島、大島・加計呂麻島・与路島・請島、徳之島）と南部（沖永良部島・与論島）との歴史・文化の違いを考える必要がある。その上で、私は、奄美諸島は独自の歴史・文化を有する地域として理解することが必要であると考える、奄美諸島から離れて住む一研究者として奄美諸島の歴史を考えるために何を為せるか考えてきた次第を述べたい。

## 一 奄美諸島史の学びの繋がり

### 1 私の奄美諸島史研究と國學院大學との繋がり

初めに、私が奄美諸島史を学ぶに至った経緯と、奄美諸島史研究において國學院大學や学界の方々から受けた学恩について記す。私は鈴木靖民氏、山里純一氏より奄美諸島史・南島史研究について導きを得、田中史生氏の論考からも古代南島史を学ぶ機会を得た。また、一九八八年に名瀬市立奄美歴史民俗資料館（現、奄美市立奄美博物館）で田畑千秋氏より奄美諸島史料調査の導きを得た。さらに、池田榮史氏と共に喜界町の城久遺跡群調査指導委員会の委員を務める機会を持ち、湯山賢一氏に古琉球期の琉球国発給文書の料紙について教示を得た。そして、金子修一教授、佐藤長門教授より二〇一三年度後期と二〇一四～二〇一八年度に大学院文学研究科の史学理論の講義の機会を得て、史料学・人物史料研究と共に地域史料研究として奄美諸島史料の紹介を行った。この時期、私は『奄美諸島編年史料古琉球期編』上（吉川弘文館）を二〇一四年六月に刊行し、二〇一八年一月に刊行に至った『奄美諸島編年史料古琉球期編』下の編纂・校正を進めていた。

私は一九七〇年から、指導教授の井上光貞先生の導きを得て、坂本太郎先生を中心に開催されてきた日本書紀研究会にも参加する機会を得た。一九七一年春であったか、笹山晴生先生の教養学部の研究室で開かれた日本書紀研究会の折、坂本先生が鈴木靖民氏の「皇極紀朝鮮関係記事の基礎的研究」を紹介され、一九六〇年代に提起された東アジア世界論を鈴木氏が実証的に再検討する研究を展開されていることを私は知った。鈴木氏に初めてお目にかかったのは、確か一九七一年一月の史学会大会の際の日本古代史懇親会においてであった。鈴木氏は、坂本先生のもとで史学科の助手を務められており、懇親会にも出席されたのであった。その後、私は鈴木氏と歴史学研究会日本古代史部

会で共に学ぶ機会を得て、対外関係史・構造主義人類学について多くの教示を得た。私は、井上先生の推挙を得て、坂本先生が理事を務められていた聖徳太子奉讃会の研究給費生に一九七二年四月より一九七四年三月まで研究課題「奈良時代の資財帳の研究」で採用された。聖徳太子奉讃会の研究給費生は、仏教学・歴史学・美術史学・建築史学等から単年度二名が採用され、歴史学分野の先任の研究給費生は、一九六六年二月から一九六八年三月までの期間に「飛鳥時代における日鮮交渉の基礎的研究」を研究課題とされた鈴木靖民氏であった。

聖徳太子奉讃会といえ、もう一つ私と國學院大學との繋りがある。聖徳太子奉讃会は、一九一二年設立の法隆寺会設立準備会、一九一三年設立の法隆寺会、一九一八年設立の聖徳太子一千三百年遠忌奉讃会の活動に基づき、一九二四年に設立された。その後、財団法人聖徳太子奉賛会は一九九八年四月に解散となり、法人の残余財産等は細川護貞氏が奉讃会の会長を務められていたので、細川家の財団法人永青文庫に移管された。奉讃会理事・主事を務められていた増山太郎氏は財団法人永青文庫の常務理事となられ、『聖徳太子奉讃会史』の制作を企画された。二〇〇八年であったか、増山氏から「聖徳太子奉讃会史の刊行の準備をしているが、編集専門の方に参加してもらいたいので、どなたか紹介していただけないか」との連絡を受け、私は、吉川弘文館の出版物に関わった折に編集を担当されていた三橋広延氏を紹介した。増山氏は「あとがき」に、「元吉川弘文館編集部勤務の三橋広延氏が引き受けくださった。筆者が迷っていると立ちどころに方向を指示してくださったり、原稿の一つ一つの確認作業など万端にわたって助言をいただいた」と謝意を記されている。『聖徳太子奉讃会史』の「聖徳太子奉讃会の思い出」には、給費研究生を務めた鈴木氏の「奉讃会研究生の思い出」、松木裕美氏の「聖徳太子奉讃会の思い出」、私の「聖徳太子奉讃会の思い出」が掲載されている。

私は一九七四年四月に東京大学史料編纂所に入所し、編年史料第一部第一室（現、古代史料部第一室）において、

土田直鎮先生、林幹彌先生のもとで『大日本史料』第一編の編纂に従事し、最初に『大日本史料』第一編之二十（天元五（九八二）年閏十二月～永観二（九八四）年二月。一九七七年三月刊）の編纂に参加した。史料編纂所を一九七六年三月に退官されていた彌永貞三先生が研究室に來られ、『東アジア世界における日本古代史講座』に遣唐使の停止などについて書かねばならないが、代わりに書かないかと私に言われた。遣唐使の停止（寛平六（八九四）年）とその後の外交政策は『大日本史料』第一編に關わり、また講座の編集を井上先生が担当されていたので、彌永先生に代わり執筆することにした。私は、『大日本史料』第一編之二十の永観元（九八三）年八月一日第三条「大法師裔然、宋商陳仁爽等ノ船ニ駕シテ、宋ニ赴ク、」の編纂を経験していたので、「日本古代一〇世紀の外交」を執筆し、『東アジア世界における日本古代史講座』第七卷・東アジアの変貌と日本律令国家（学生社、一九八二年一月刊）に掲載することができた。そして私は、古代對外關係の概説を執筆する機会を得た。<sup>4</sup>しかし、いつであつたか、鈴木氏から、對外關係史研究のためには、相手となる国・地域に赴きそこから倭・日本を見なければならぬと訓えられた。

## 2 鹿兒島短期大学付属南日本文化研究所奄美諸島学術調査への参加

歴史学研究会日本古代史部会で共に学んだ小林敏男氏（現、大東文化大学名誉教授）が、一九八〇年に鹿兒島短期大学（二〇〇一年度より鹿兒島国際大学短期大学部）に赴任された。私は、小林氏から、五月の歴史学研究会大会に來られた折、鹿兒島短期大学付属南日本文化研究所が毎年実施する奄美諸島学術調査に参加している、奄美諸島には古代の女性祭祀者を偲ばせるノロや古代の倉に似た高倉がある、史料に基づく研究が松下志朗氏の『近世奄美の支配と社会』（第一書房、一九八三年）によりなされている、と奄美の歴史についての話を聞く機会があつた。私は對外關係史研究には現地に行くことが必要との鈴木氏の訓えと、自らの古代社会構造研究への関心から、小林氏にお願い

し鹿児島短期大学学長の三木靖先生の御承諾を得て、大島の笠利町（現、奄美市笠利）で一九八八年九月に一週間実施された南日本文化研究所の奄美諸島学術調査に参加させていただいた。南日本文化研究所の奄美諸島学術調査では、鹿児島短期大学や鹿児島の諸分野の先生方が参加されており、また奄美諸島で郷土史研究を進められている方々にお目にかかり、奄美諸島の歴史・文化について多くのことを教えていただいた。一九八八年の調査では、笠利町での調査に次ぎ、小林氏と共に週末、名瀬市（現、奄美市名瀬）に移り、鹿児島県立図書館奄美分館（現、鹿児島県立奄美図書館）で郷土資料書架を見学し、名瀬市立奄美歴史民俗資料館（一九八七年七月開館。一九九〇年七月に名瀬市立奄美博物館、二〇〇六年三月に奄美市立奄美博物館と改称）で主幹学芸員田畑千秋氏に「名瀬市史編纂委員会資料」等を閲覧させていただいた。奄美歴史民俗資料館は一九八七年七月に開館したところで、大島の御出身で民俗学を研究されていた田畑氏が館の事業展開を領導されていた。

私は、一九七八年度から史料編纂所の『日本荘園絵図聚影』編纂事業に参加して古代荘園図調査を担当する機会を得て、天平七（七三五）年弘福寺領讚岐国山田郡田図の調査を一九七八年末から始めた。山田郡田図は、東寺文書として伝来し、近世後期に国学者に知られ寺外に出て、明治一五（一八八二）年に香川県志度町（現、さぬき市志度）の多和神社宮司で金刀比羅宮禰宜であった松岡調が入手し、松岡家の多和文庫に収蔵されることになった。<sup>(5)</sup>多和神社宮司松岡弘泰氏には、多和文庫所蔵の山田郡田図や文書典籍の調査で御教導いただいた。松岡宮司は、國學院大學の御出身とうかがっている。山田郡田図が、一九七八年に山田郡田図に次いで調査した香川県白鳥町（現、東かがわ市白鳥）の猪熊家の恩頼堂文庫所蔵の大和国乙木庄条里坪付図（現、国立文化財機構蔵、奈良国立博物館保管）と共に一九九一年に重要文化財に指定された時は、文化庁の調査官として湯山賢一氏が担当された。私は、山田郡田図調査の関係から、高松市の太田第二土地区画整理事業に伴う高松市教育委員会による弘福寺領讚岐国山田郡田図故地関係





の報告の機会を得た。『マツノト遺跡』の「序文」・「おわりに」に、鈴木氏のシンポジウム開催の尽力の次第が記されている。

### 3 正倉院文書研究からの繋がり

私は、史料編纂所で、一九七七年度から、土田先生と皆川完一先生のもとで、正倉院宝物の正倉院古文書（通称、正倉院文書）の調査に参加することになった。毎年秋季の正倉院開封期間中に、宮内庁の許可を得て正倉院事務所で実施される正倉院古文書調査の折、私は奈良国立博物館で開催される正倉院展を観覧した。正倉院古文書は皇后宮職や東大寺等の写経事業等に関わる文書群で、正倉院宝物には正倉院古文書の外に献物帳・宝物附随文書・宝物出納文書や文書の往来軸、また宝物に付された銘文等の文字資料がある。正倉院事務所保存課長であった松嶋順正先生の編著『正倉院寶物銘文集成』（吉川弘文館、一九七八年七月）は、正倉院宝物中の銘文や宝物附随文書等を掲載する資料集で、華嚴経論の帙に反故として使用されていた新羅村落文書等の新羅文書も紹介されている。鈴木靖氏は「正倉院佐波理加盤付属文書の基礎的研究」（『朝鮮学報』八五号、一九七七年一〇月）により、正倉院宝物中の新羅文書の研究を発表された。私は、正倉院古文書を研究するには正倉院宝物中の文書や往来軸や銘文資料等も知る必要があることを認識した。そして、『正倉院寶物』（全一〇巻、毎日新聞社、一九九四～一九九七年）を見ていたところ、『正倉院寶物』9・南倉Ⅲ（一九九七年）に、南倉174「古櫃」の「第206号櫃」（唐櫃）に納められたヤコウガイの螺殻（「其25 螺殻」）が掲載されていることを知った。正倉院宝物にはヤコウガイを用いた螺鈿細工の宝物があることは知っていたが、螺殻が残されていることには驚いた。また「第206号櫃」には、「其24 椰子実」もあった。『正倉院寶物』9には、「其24 椰子実」について、「ココヤシの果核を自然のままの形で利用し、人面に見立てて目鼻眉を描いたも

の、内面に塗料の塗られたような痕跡があることから、容器として用いたものとされる。南方より漂着した椰子を加工したのか、すでに加工したものを輸入したのか、さまざまな可能性が考えられるが、はっきりしたことはわからない。建久四年（一一九三）の開検目録に「海罇（罇）子」と記されるものあたり、そのころすでに宝庫に納められていたものと考えられる」（二四八頁）、「其25 螺殻」について、「夜光貝の貝殻。正倉院に伝わる螺鈿で飾った宝物のほとんどが夜光貝を用いているが、本品が工芸材料として宝庫に伝わったものかどうかは不明」（二四八頁）と記してある。螺殻と椰子実は、二〇〇八年の第六〇回正倉院展に、同じ唐櫃に納められた虹籠（イタチ科のテン（貂））と共に出陳された。椰子実は、『正倉院紀要』三三二号（宮内庁正倉院事務所、二〇一〇年三月）の「年次報告」に調査結果が掲載され、螺殻については木下尚子氏の「正倉院伝来の貝製品と貝殻―ヤコウガイを中心として―」（『正倉院紀要』三一号、二〇〇九年三月）に調査所見が記されている。私は、奄美諸島を含む南島と古代日本との交流を、ヤコウガイや椰子実からも考えることが必要であると、正倉院宝物から改めて認識した。

#### 4 「沖縄の歴史情報研究」への参加と島津家文書データベース公開

私は、一九八四年から史料編纂所で歴史情報処理システム導入に関わっていたので、重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」（一九九四～一九九七年度。研究代表者、岩崎宏之）に参加の機会を得た。私は、「沖縄の歴史情報研究」の活動で、沖縄の研究者と交流の機会を得るとともに、沖縄を訪問した際には琉球大学に勤務されていた山里純一氏に教示を得た。山里氏には、御郷里の石垣島の史跡や祭祀も案内していただいた。私は、南島の馬への関心から、二〇〇九年二月、山里氏に石垣島の島馬を案内していただき、また近世の琉球王府の御厩別當真喜志家の家譜を石垣市在住の御子孫のお宅に伺い見せていただいた。さらに私は、一人で与那国島に渡り、山里氏から紹介を得た与那国

島馬保存会顧問の方に北牧場を案内していただき、またNPOヨナグニウマふれあい広場で島馬に乗ることができた。

私は、「奄美群島編年史料集稿」二一（『南日本文化』二三号、一九九一年三月）編纂の時から、琉球家譜の奄美諸島関係記事の採録を、那覇市企画部市史編集室編の『那覇市史』資料篇第1巻5家譜資料(一)総合、6家譜資料(二)久米系家譜、7家譜資料(三)首里系、8家譜資料(四)那覇・泊系（一九七六年、一九八〇年、一九八二年、一九八三年）と『氏集』（一九七六年初版。現在、第五版増補改訂版、那覇市歴史博物館刊、二〇〇八年）により始めた。一九九四年一〇月に「沖繩の歴史情報研究」の研究会を史料編纂所で開催した時、那覇市市民文化部歴史資料室室長の田名真之氏（現、沖繩県立博物館・美術館館長）が参加され、歴史資料室には『那覇市史』資料篇に掲載されていない琉球家譜の写本や複写版が多数あるからと私に閲覧を勧めて下さった。私は、一九九六年に那覇市の歴史資料室を訪問し、琉球家譜等の閲覧をした。そして私は、二〇一〇年まで、歴史資料室とその後継施設の那覇市歴史博物館を度々訪問して琉球家譜を閲覧し、また沖繩県立図書館郷土資料室においても琉球家譜や東恩納寛惇文庫の資料等を閲覧し、奄美諸島・鹿児島藩・日本等に係わる記事を探してきた。「沖繩の歴史情報研究」では、一九九五年から大分大学に務められていた田畑千秋氏に相談し、一九九六年一月に総括班研究会「奄美の琉球史料―奄美地域の歴史情報研究」を奄美博物館で開催した。私はこれを機に、奄美博物館の久伸博氏（現、奄美市教育委員会文化財課長）・高梨修氏（現、奄美博物館長）や奄美諸島の地域史研究者と新たな交流の機会を得ることができるようになった。

「沖繩の歴史情報研究」に参加した史料編纂所は、山本博文氏を中心に島津家文書（狭義の「島津家文書」と島津家本等とからなる）の目録のデータベース作成を進め、鹿児島県歴史資料センター黎明館（現、鹿児島県歴史・美術センター黎明館）の委託事業『島津家文書』の収集研究（一九九七―一九九九年）により島津家文書のマイクロフィルム撮影を行った。また史料編纂所は、歴史情報システム充実の一環として『大日本史料』や『大日本古文書』

の画像データベースも公開した。これらの事業により島津家文書のデータベース公開が展開し、古代史を学ぶ私でも島津家文書を利用できる環境となった。黎明館は、二〇〇〇年九月二十九日から一〇月二二日まで「奇跡の至宝「島津家文書」展」を開催し、史料編纂所は島津家文書を出陳した。また史料編纂所は、『大日本史料』等刊行開始百周年記念事業として、東京国立博物館と共催で二〇〇一年二月一日から二〇〇二年一月二七日に特別展「時を超えて語るもの―史料と美術の名宝」を開催し、島津家文書も出陳した。私は島津家本の名越左源太編著『南島雑話』の展示解説を書いた。また私は、『画像史料解析センター通信』二九―三五・三七・三九―四九号（二〇〇五年四月―二〇〇六年一〇月、二〇〇七年四月、二〇〇七年一〇月―二〇一〇年四月）に「南島雑話とその周辺」(1)―(18)・訂正表)を掲載し、『南島雑話』や琉球・奄美諸島画像史料の研究を試みた。数年前、国立臺灣大學圖書館所蔵田代安定文庫から『南島雑話』の原本の残簡が見出されたが、その利用には条件があることを知り、私の『南島雑話』研究は止まっている。

## 5 奄美諸島における奄美諸島史料研究の新展開

二〇〇一年一〇月、奄美郷土研究会の弓削政己氏及び瀬戸内町・宇検村・住用村・大和村の自治体誌編纂関係者等の調査により、鹿児島県立図書館所蔵「大島古図」(P.288)が鹿児島藩の作成した嘉永四―五年(一八五一―五二年)の海防図であることが明かにされ、二〇〇二年三月に名護博物館所蔵「琉球寫真景」(一九八三年寄贈)が京都四条派の岡本豊彦(一七七三―一八四五年)の作品の奄美大島風景画一一点であることが明かにされた。<sup>(8)</sup>二〇〇二年八月に奄美博物館で「琉球寫真景」が展示され、二〇〇三年四―七月に黎明館の「描かれた奄美」展で「大島古図」と「琉球寫真景」が展示され、二〇〇三年八月に笠利町立歴史民俗資料館(現、奄美市歴史民俗資料館)

で「大島古図」が展示され、同年八月九月に奄美博物館の「古文書が語る奄美」展で「大島古図」が展示された。一九九〇年に奄美博物館に寄贈されていた永井家本『南島雑話』の修復となり、二〇〇四年九月に奄美博物館の「南島雑話と名越左源太」展で公開された。私は史料編纂所画像史料解析センターの研究費で、二〇〇五年三月に「大島古図」を撮影し、鹿児島県立図書館に原寸大カラー写真と画像ファイルを寄贈した。<sup>9)</sup>「大島古図」の撮影は、鹿児島県立図書館の許可を得て、隣の黎明館の写場に借り出し、東京から派遣された大型資料撮影に熟練した写真技師により、絵図に正対し全体撮影と区分撮影できる装置を搬入して行われた。私は、「琉球寫真景」も名護博物館の許可を得て二〇〇七年一月に沖縄の写真撮影業者に撮影してもらい、名護博物館にカラーフィルムとプリントを寄贈し、史料編纂所にはカラープリント (color print)。附、画像データ) を収蔵した。このように二〇〇〇年前後から、新たな奄美諸島の画像史料が出現し、また小湊フワガネク遺跡 (奄美市)・城久遺跡群 (喜界町)・カムイヤキ窯跡遺跡群 (伊仙町)・赤木名城跡 (奄美市) 等の遺跡・史跡の調査研究の展開もあり、奄美諸島史研究は新段階に進むこととなった。私もこのような状況の下、奄美諸島編年史料編纂と共に、様々な前近代奄美諸島史料にも関わるようになった。

## 二 奄美諸島の歴史文化遺産と奄美諸島史

### 1 系図文書焼棄論を超えて

国指定及び鹿児島県指定の奄美諸島十二市町村の文化財は、天然記念物・建造物・考古資料・史跡・民俗文化財等多数あり、鹿児島県教育委員会ホームページ「鹿児島県内の文化財一覧」に、二〇一九年八月現在、六九件が示されている。さらに十二市町村のホームページにも文化財の一覧や概要が公開されている。一九八八年に鹿児島県立図書館

館奄美分館と名瀬市立奄美歴史民俗資料館で、『名瀬市誌』等市町村誌、「名瀬市史編纂委員会資料」等の地域史誌編纂資料、『奄美郷土研究会報』等郷土史研究誌を閲覧した時、私は、松下志朗先生が『近世奄美の支配と社会』の「参考書目」に収載された膨大な奄美諸島の史料と地域史研究論著の存在を実感した。そして私は、南日本文化研究所の調査に参加して各市町村の図書館や資料館等を巡り、奄美諸島史料と市町村誌編纂資料が多く蓄積されていることも知った。二〇一九年時点の奄美諸島の市町村誌や資料集は、表1の如くである。表1では、郷土史研究会誌、発掘調査報告書や史跡関係報告書は略するが、PDF版公開の報告書等は奈良文化財研究所データベースや奄美遺産活用実行委員会「電子ミュージアム奄美」で確認できる。

私は、二〇〇八年度より人間文化研究機構で研究情報資源共有化事業を担当したことから人文系情報学研究者との交流の機会を得て、情報処理学会の第九三回人文科学とコンピュータ研究発表会を、奄美博物館の協力により二〇一二年一月に奄美市で開催することができた。私は、研究発表会で「奄美遺産から日本列島史を見直す」（注1参照）の報告を行い、多様で豊かな奄美諸島史料について語るために、先に「歴史と素材」（注1参照）で記した奄美諸島史における系図文書焼棄論について再度論じた。明治時代以来、奄美諸島史研究において、系図文書焼棄論が主張されてきた。加計呂麻島の芝（瀬戸内町）出身で、戦後の奄美群島日本復帰運動を主導したロシア文学者の昇曙夢<sup>しよむ</sup>は、戦中から執筆を始めて一九四九年に公刊した『大奄美史』（奄美社）において、「凡そ扱べき歴史を有たない民族ほど哀れむべきものはない。歴史は実にその民族が祖先の業績と伝統とを立証する唯一の貴重な資料であるばかりでなく、民族生活の依て立つべき大きな背景であり、同時に将来の発展向上を図るうえにおける最も強い大きな力である。ところが大島の人々はその誇りであり力である歴史を藩庁の奸計によつて根こそぎ失つたのである。それがため島民は誇るべき祖先の伝統を失つて、自卑自屈の敗残者として暗い運命を辿らなければならないやうになつ

表1 奄美諸島十二市町村地域の地域誌編纂事業及び地域誌・史料集等一覧

2019年11月現在

注 (1)『沖縄県史』、『歴代宝案』、『那覇市史』資料編等の沖縄地域誌・琉球史料集は略す。(2)『鹿児島県史料』名越輝敏史料～九(2011年3月～2020年3月)は略す。(3)『大日本古記録』島津家文書、『大日本史料』等は略す。(4)個別の論文は略す。(5)1982年以前の史料集等詳細一覧は松下志朗『近世奄美の支配と社会』の「参考書目」参照。

年	喜界島	大島・加計呂麻島・与路島・諸島	徳之島	沖永良部島	与論島	奄美諸島全域
1962年		名瀬市誌編纂事業開始				
1963年		名瀬市史編纂委員会史料目録作成開始 『名瀬市誌』上				『藩法集』8 鹿児島藩・上(列朝制度収録) 原口虎雄編
1969年						『鹿児島県立図書館奄美分館郷土資料目録』昭和44年3月1日現在 松下志朗等編『道之島代官記集成』
1970年		『名瀬市誌』中	『徳之島町誌』			
1971年						鹿児島県立図書館奄美分館編『奄美史料』1 大島要文集
1972年						『奄美史料』2 大島私考
1973年		『名瀬市誌』下 『笠利町誌』				『奄美史料』3 九郎談上
1974年						『奄美史料』4 九郎談中
1975年						『奄美史料』5 九郎談下
1976年						『奄美史料』6 大島郡糖業関係合規集
1977年		『瀬戸内町誌』民俗編				『奄美史料』7 大島日記
1978年			『天城町誌』 『伊仙町誌』			『奄美史料』8 笹森儀助大島々司中 島庁関係資料1
1979年						『奄美史料』9 笹森儀助大島々司中 島庁関係資料2
1980年						『奄美史料』10 笹森儀助大島々司中 島庁関係資料3
1980年						亀井勝信編『奄美大島諸家系譜集』
1981年						『鹿児島県立図書館奄美分館郷土資料目録』昭和55年3月31日現在
1982年					『知名町誌』	
1983年		『名瀬市誌』復刻版				
1984年					『和泊町誌』	国分直一・恵良安校注 『南島雑話 幕末奄美民俗誌』一・二(東洋文庫431・432)
1985年						鹿児島短期大学付属南日本文化研究所編『奄美研究関係文献目録 歴史・宗教・地理・民謡・芸能・民俗』南日本文化

15 奄美諸島編年史料編纂の成果と課題

						研究所叢書 10
1988年		『龍郷町誌』歴史編・民俗編			『与論町誌』	
1991年		改訂名瀬市誌編纂事業開始				山下文武「加島家文書について」『奄美博物館紀要』創刊号
1992年		先田光演編著『奄美の豪族伝説 与湾大親 宇檢村白井家文書』宇檢村振興育英財団刊				
1993年		『改訂名瀬市誌編纂委員会資料集』1 三方村・名瀬市合併記録	「小林文庫資料(古文書)目録」、徳之島町図書館			
1994年		『改訂名瀬市誌編纂委員会資料集』2 基家・慶家文書				
1996年		『改訂名瀬市誌編纂委員会資料集』3 大島喜界両島史料雑纂 『改訂名瀬市誌』1・2・3				
1998年		『奄美博物館資料集』1 明治四年未二月御廻文留写				
1999年		『瀬戸内町誌歴史編資料集』1 新聞資料集				
2000年	『喜界町誌』					
2002年		『住用村誌資料編』1 奄美の戦後処理事務、2 中山國教条の世界				
		『瀬戸内町誌歴史編資料集』2 諸書附留、3 武家文書				
2003年		『瀬戸内町誌史編資料集』4 芝家文書 『大和村誌資料集』1 大和村の近現代				
2005年		『大和村誌資料集』2 大和村の民俗				
2006年		『大和村誌資料集』3 大和村の近世				松下志朗『奄美史料集成』、南方新社(道之島代官記集成等)
2007年		『瀬戸内町誌』歴史編 『奄美大島屋喜内の文書』宇檢村誌資料編第二集				松下編『南西諸島史料集』1、南方新社
2008年						松下編『南西諸島史料集』2(名越左源太関係史料等)
2009年			和泊町歴史民俗資料館編『藩政時代の沖永良部島の記録』			松下編『南西諸島史料集』3(奄美法令集)
2010年		『大和村誌』				山下文武編『南西諸島史料集』4(土国日記等)
2011年						宇檢村・伊勢町・奄美市 『宇檢村・伊仙町・奄美



						市による歴史文化基本構想』 山下文武編『南西諸島史料集』5（諸家文書）
2012年			徳之島町郷土資料館編『仲為日記 文永3年9月21日途中より明治元年正月13日まで』		先田光演『与論島の古文書を読む』、南方新社（代官記録、諸家文書等）	
2014年						石上『奄美諸島編年史料古琉球期編』上
2015年		奄美市教育委員会 編『史跡赤木名城跡保存管理計画書』	伊仙町地域文化遺産総合活性化実行委員会事務局編『伊仙町の文化遺産：伊仙町における奄美遺産悉皆調査報告書』			先田光演『仲為日記』、南方新社
2017年			徳之島町誌編さん事業開始			
2018年		『宇検村誌』自然・通史編	徳之島町誌編さん室開室			石上『奄美諸島編年史料古琉球期編』下
2019年			『『徳之島町史』基礎資料集』徳之島町誌叢書 1			

た」（二六六～二六七頁）と論じ、奄美大島の「文化史的意義を闡明」し「奄美諸島に寶石の如く散在する豊富なる文化財を、広く方言・宗教・土俗・風習・歌謡・伝説等に亘つて、普く蒐集し、出来得る限りその由来と根源を探究しながら、その民俗学的意義を闡明」し、「余りにも圧迫された過去の悲惨な思ひ出と、今では潜在意識とまでなつてゐる暗い心理より島民を解放して、明るい希望の生活に向け直」すという希いを記した（二～三頁）。昇の『大奄美史』は、奄美の歴史と文化を知ることを通じて同胞の覚醒を求める書でもあった。しかし、昇の「大島の人々はその誇りであり力である歴史を藩庁の奸計によつて根こそぎ失つた」との認識は、系図文書焼棄論によるものであった。ととなりつゝよし都成植義が『奄美史談』（明治三十三年版。山元徳二刊）で提示した系図文書焼棄論は、元禄九（一六九六）年四月二十三日の鹿兒島大火により、元禄七年の鹿兒島藩士に対する記録所への文書差出の命令に従い、奄美諸島の間切役人層が元禄八年に記録所に提出した系図・文書（多くの場合、写本が提出され原本は現地に残された）が焼失し

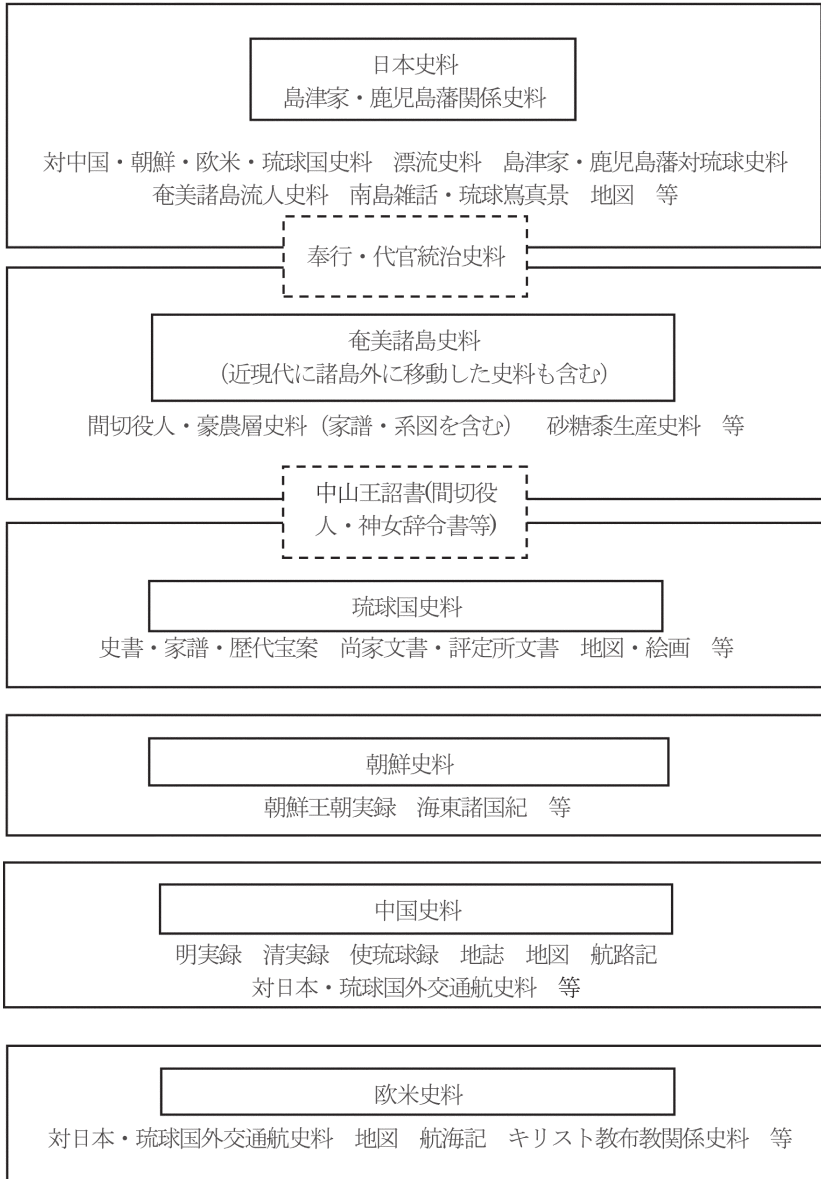
た事故の記憶が、鹿児島藩による奄美諸島支配への反撥によって権力的略奪・隠滅による被害の伝承へと転化したものである。元禄八年の大島からの文書差出は、大島の和家文書・松岡家文書に、間切役人層から文書を預かり記録所に提出した前代官伊地知五兵衛の預状などが残されており、謀略による詐取・焼却ではなかった。宝永三（一七〇六）年の文書差出令に従って奄美諸島から系図・文書等を差出した事例は、大島屋喜内間切須古の元家系図〔奄美大島諸家系譜集〕、喜界島志戸桶間切志戸桶の孝野家文書に残されている。琉球国・鹿児島藩統治時代の奄美諸島関係史料は、奄美諸島史料を核として多様な分野からなり、多くの史料が残されている。

## 2 黎明館「奄美群島歴史資料調査事業」の成果

〔図 琉球国・鹿児島藩統治時代の奄美諸島関係史料〕に示す如く多様な奄美諸島史料が残されている。私は、一九九九・二〇〇〇年度と二〇〇三・二〇〇四年度に、鹿児島県歴史資料センター黎明館の史料編さん顧問を務める機会があった。二〇〇一年一月二六日開催の編さん顧問会議で、私は鹿児島県史料全体への己の知識が十分ではないことを知りつつも、奄美諸島には多くの史料が残されているので『鹿児島県史料』で奄美諸島史料を取り上げてはいかかかと発言した。前年二〇〇〇年二月五日の黎明館講演会で「古奄美諸島社会史―四―一六世紀の奄美―」の話をさせていただき<sup>10</sup>、また会議翌日二七日の講演会でも「一七世紀の奄美諸島社会」の話をさせていただく予定であったこともあり、今吉弘館長は奄美諸島史料調査の必要を理解されて即座に対応して下さった。黎明館において、鹿児島県の地域雇用促進事業による「奄美群島歴史資料調査事業」が、尾口義男調査史料室長を中心として企画され、二〇〇二～二〇〇四年度に奄美郷土研究会に委託して実施された。私は、編さん顧問会議で奄美諸島史料総合調査の必要性を述べたこともあり、二〇〇三・二〇〇四年度に再度、編さん顧問会議に参加する機会もあったので、「奄美群

図 琉球国・鹿児島藩統治時代の奄美諸島関係史料

注 奉行・代官統治史料は、鹿児島藩が発給した奄美諸島内に伝存する鹿児島藩史料。中山王詔書は、琉球国が発給した奄美諸島内に伝存する琉球国史料。



島歴史資料調査事業」の経過と成果の概要を、編さん顧問会議の場でまた調査史料室の方々より何う機会を得た。「奄美群島歴史資料調査事業」を受託した奄美郷土研究会は、奄美博物館の協力を得て調査本部を奄美博物館に置き、改訂名瀬市誌編纂委員会編『改訂名瀬市誌』一・二・三（名瀬市、一九九六年六月）の事業への参加の経験を有した児玉永伯氏が調査の総括を担当した。「奄美群島歴史資料調査事業」の調査本部は、奄美諸島を中心に調査を実施し、三年間で八千数百件の史料の調査と一部の史料の写真データを作成し黎明館に提出した。調査成果の歴史資料目録・目録カード・写真データは黎明館に納められ、目録カード等の副本は奄美博物館にも保管されている。黎明館は、事業成果公開をデータベースにより行うため、鹿児島大学附属図書館と協議して二〇〇五年に協定を締結し、調査データは鹿児島大学附属図書館ホームページから「奄美古文書所在目録データベース」として公開された。

私は、後述の「宇検村・伊仙町・奄美市文化財総合的把握モデル事業」（二〇〇八～二〇一〇年度）の歴史文化基本構想策定専門委員会に参加した時、黎明館の徳永和喜調査史料室長（現、西郷南洲翁顕彰館館長）に委員として参加していたが、奄美遺産の核となる奄美諸島史料の記録・保存・活用について検討した。徳永氏は、黎明館の「奄美群島歴史資料調査事業」の奄美郷土研究会への委託実務と、奄美郷土研究会から各年度事業終了時に黎明館に送付された調査カード・集計表の受入れと管理を担当されていたので、「奄美群島歴史資料調査事業」の成果が「奄美遺産」の重要な構成部分となることを理解され、二〇一〇年一月に調査史料室で三か年の集計表を統合した調査票一覧を作成された。調査史料室の教示によると、黎明館は二〇一三年三月に、奄美諸島十二市町村教育委員会に「奄美群島歴史資料調査事業」成果データをDVD版にして配布されたとのことである。ただし、「奄美群島歴史資料調査事業」の調査カードには、史料群・個体史料の階層構造が十分には記載されておらず、また同一史料の原本と写本・複写本と史料集の相互関係が記述されていない事例、一史料群に属する個体史料が独立した史料として扱われている事

例、史料群のみ掲出され当該史料群を構成する個体史料の個別情報が無い事例など、史料目録としてなお整理すべきところがある。奄美諸島史料研究のためには、調査カード情報を集成した調査表一覧を基に、目録を、史料、史料群、地域史料群等の階層構造に整理し直す必要があると私は考えている。

### 3 文化財総合的把握モデル事業と「奄美遺産」の提言

文化庁は、二〇〇七年一〇月三〇日の「文化審議会文化財分科会企画調査会報告書」において文化財の総合的把握のために「地方公共団体による「歴史文化基本構想」の策定」を提起し（文化庁ホームページ、文化審議会文化財分科会企画調査会平成18年度）、「歴史文化基本構想」とは、地域に存在する文化財を、指定・未指定にかかわらず幅広く捉えて、的確に把握し、文化財をその周辺環境まで含めて、総合的に保存・活用するための構想であり、地方公共団体が文化財保護行政を進めるための基本的な構想となるものです。各地方公共団体が「歴史文化基本構想」において、文化財保護の基本的方針を定めること、さらに、文化財をその周辺環境も含めて総合的に保存・活用するための方針等を定めることにより、「歴史文化基本構想」が文化財保護に関するマスタープランとしての役割を果たすことが期待されます。加えて、文化財を生かした地域づくりに資するものとして活用されることも期待されます」と提示した（文化庁ホームページ、「歴史文化基本構想」について）。歴史文化基本構想策定のために、文化庁による「文化財総合的把握モデル事業」が二〇〇八年度より三か年計画で実施され、広域連携モデル事業の一つとして宇検村・伊仙町・奄美市の文化財総合的把握モデル事業が採択されて二〇〇八年一〇月より二〇一一年三月まで実施され、「奄美遺産」が提言された。「文化財総合的把握モデル事業」の成果は、『月刊文化財』五七七号（二〇一一年一〇月）に、宇検村・伊仙町・奄美市の事業が「奄美遺産の提案（宇検村、伊仙町、奄美市）」として報告されている。また

事業報告書『宇検村・伊仙町・奄美市歴史文化基本構想』（宇検村・伊仙町・奄美市、二〇一一年三月）は、奄美市ホームページ「文化財∨歴史文化基本構想」と文化庁ホームページ「各地方公共団体が策定した「歴史文化基本構想」にPDF版が公開されている。私はこの事業を企画し先導した中山清美奄美博物館長（当時）に依頼され、歴史文化基本構想等策定専門委員会委員長を務めた。宇検村・伊仙町・奄美市の文化財総合的把握モデル事業は、奄美諸島十二市町村のうちの三市町村によるものであるが、奄美諸島全体の文化財の総合的把握の方策を検討し、十二市町村全体の文化・自然遺産を「奄美遺産」として把握することを提唱した。「奄美遺産」を構成する「市町村遺産」は、「不動産遺産」（遺跡、建築物・工作物、自然物等からなる「実態要素」と、居住・信仰・伝承・生産採集に関わる場や遊び・流通往来の場や島尾敏雄・田中一村・復帰運動等ゆかりの場などの「空間要素」と、「動産要素」（文献・資料、美術工芸品、民俗器具装束等の「有形要素」と、民俗・伝承、唄者・古老・語り部等の人物等の「無形要素」）から構成されることが提起された。また歴史文化基本構想については、「電子ミュージアム奄美」からも、宇検村・伊仙町・奄美市による事業が紹介されている。「奄美遺産」には多様な要素があるが、私は、歴史研究者の立場から、奄美諸島史料を「奄美遺産」の重要な構成要素として記録・保存・活用する課題が提示されたと考えている。「奄美遺産」は、奄美群島文化財保護対策連絡協議会においても提起され、奄美諸島十二市町村の文化行政の課題として位置付けられた。同時期に、鹿児島県大島支庁『奄美地域将来ビジョン』人と自然が共生する癒し・活力・結いの島づくり（二〇〇八年三月策定の「かごしま将来ビジョン」に基づく）が提案され、その中で「挑戦5…地域文化・歴史の保存・伝承と地域に根差した人材育成」が提示された。奄美群島振興事業に歴史文化が事業の柱の一つとして組込まれる新たな状況が生まれた、と私は考えた。なお、提言から十年を迎える現時点において、「奄美遺産」の課題がどのように進んでいるかの確認も必要である。また同時期に、奄美群島・琉球諸島を世界自然遺産に登録す

る運動が、環境省・林野庁・鹿児島県・沖縄県によって進められ、二〇一三年一月、世界遺産条約関係省庁連絡会議において「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づく日本の世界遺産暫定一覧表に自然遺産として「奄美・琉球」を記載することが決定された。その後、二〇一九年二月、再度、「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産登録のユネスコへの推薦書が提出され、登録実現が期待されている。世界自然遺産としては動植物の生態系が対象となるが、「奄美遺産」を記録し保全する活動においては、自然と人間社会の共生の場の生態系・自然環境として世界自然遺産の諸課題に関わることが必要であろうと私は考えている。

文化財総合的把握モデル事業の成果を具体化するため、二〇一〇年度後期から文化庁により「地域伝統文化総合活性化事業」が開始され、天城町・伊仙町・奄美市の三事業が採択された。また同事業は二〇一一年度から文化庁による「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」として展開され、さらに瀬戸内町等の事業も採択された。私は奄美市においては奄美博物館の久伸博氏・高梨修氏の企画により、伊仙町においては伊仙町歴史民俗資料館の四本延宏氏・新里亮人氏の企画により、「地域伝統文化総合活性化事業」・「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」に二〇一〇年度末から二〇一四年度まで参加する機会を得た。私は、伊仙町の事業では徳之島町や天城町の史料にも視野を広げ、報告書に「徳之島の歴史から日本史を学び直す」<sup>(13)</sup>を掲載し、徳之島の前近代史料を「奄美遺産」として掌握する試みを提示した。

奄美諸島の歴史文化遺産を地域振興と日本列島の歴史文化の究明のために活かし、かつ後世に伝えていくうえで、歴史文化遺産の記録・収集・保全・情報資源公開、そしてそれらの成果・蓄積に基づく歴史文化遺産の活用は重要な課題である。噴火・地震・津波・風水害、火災、戦争により被災してきた日本列島各地域の歴史文化遺産を後世に伝える課題と、現に地域振興のために歴史文化遺産の活用を進める地域社会の課題とは深い関わりがあり、地域社会と

学界が連携した歴史文化遺産の保全は重要な課題である。歴史資料は、歴史現象とその時間・空間・参加者を確定する情報として「奄美遺産」の核となるものであり、歴史学においては「奄美群島歴史資料調査事業」の成果を利用してきる。地域の歴史文化遺産の核としての歴史資料の蓄積・活用のためには、史料群・史料の所在目録、史料群・史料毎の詳細目録（史料一点毎の名称・法量・様式・内容等の情報）、史料集（翻刻版・影印版、編年体史料集）の作成が必要である。そして奄美諸島に関わる歴史資料を、日本国内・世界からも集成して世界性・全国性・地域性を確保することが必要である。「奄美遺産」としての歴史資料群の収集・記録・情報資源化・公開には、奄美諸島十二市町村が連帯し、鹿児島県・文化庁、歴史学・民俗学・考古学・言語学・美術史学・芸術史学の諸分野との連携を実現することが必要である。教育文化行政と、地域文化の研究・保存・活用運動や学術調査研究との連携なくしては、地域歴史文化遺産の収集・記録と保全・活用は実現できない。奄美諸島編年史料編纂を進めることによって、奄美の歴史文化遺産の記録・保存・活用に少しでも寄与できればと、私は一個人として考えている。

奄美諸島には、古琉球期の琉球国中山王詔書（辞令書とも称される）、古琉球期から続く系図、鹿児島藩統治期の文書等、大量の前近代史料が残されているが、古文書等の実物観察による調査作成等の史料調査記録は十分な展開には至っていない。そのような中で、大島に残る琉球国中山王詔書の料紙研究が、琉球国文書料紙研究の一環として富田正弘氏・湯山賢一氏等により二〇〇六年一月二月に奄美市・宇検村・瀬戸内町で行われ、私は史料編纂所の林讓氏と同行する機会を得た。大島の中山王詔書の料紙分析の結果は、富田正弘氏の「琉球国発給文書と竹紙」（『東京大学史料編纂所研究紀要』一七号、二〇〇七年三月。PDF版公開）に報告されている。現在、奄美諸島に原本または写本として伝存し、または系図・文書集に収載されている琉球国中山王詔書には、二〇〇二年出現の喜界文書（現、国立文化財機構蔵、九州国立博物館保管）中の二点、二〇一〇年に石井嘉生氏の「奄美大島・戸円祭祀関係史料」（『儀礼



表2 奄美諸島の琉球国中山王詔書編年順一覧

2019年6月現在

	西暦	年月日	琉球国中山王詔書	史料群名 (※:系列別典)	原所在地	人名 (※:女性)	前職等 (※:混雑関係)	新職	被任命者 収載家図	料紙	備考
1	1529年	嘉靖8年12月20日	大島空利間切字宿大屋字辞令書(元禄8年差出した写本の写の転写)	糸図文書写 永代家伝記 (和家文書)*	大和村大和浜	字宿首里大屋 子(保元金の子 ちやくもい= 知屋具盛)		字宿大屋子	字宿大親家譜 糸図(和家文 書)	料紙	大和村中央公 民館所蔵「長田 (大和)須藤文 庫」架蔵和原至 氏所蔵文書写 真に原本(今 他の一部(天 辺)写る
2	1548年	嘉靖27年10月28日	大島瀬戸内西間切大屋字辞令書	松岡家文書	奄美市名瀬佐 大隈		大島瀬戸内東間 切首里大屋子	大島瀬戸内西間 切首大屋子			
3	1544年	嘉靖33年8月29日	鬼界島志戸瀬間切大城大屋字辞令書	季節家文書	鬼界町志戸瀬	思徳	大島瀬戸内東間 切首大屋子	鬼界島志戸瀬間 切大城大屋子	季節家糸図至 永4年(1707 文書)		
4	1544年	嘉靖33年12月27日	大島姫内間切名音定辞令書	吉久家文書	宇波村名柄	たらつ	大島空利間切居番 音定	大島姫内間切名 音定		料紙	
5	1564年	嘉靖35年8月11日	大島姫内間切名音定辞令書	吉久家文書	宇波村名柄	たらつ	大島姫内間切名 音定	大島姫内間切名 音定		竹紙	
6	1568年	隆慶2年より先、嘉 靖年間か	大島瀬戸内東間切首里大屋 字辞令書	笠利氏家譜		為充	大島空利間切東 切首里大屋子	大島瀬戸内東間 切首里大屋子	笠利氏家譜		
7	1568年	隆慶2年8月24日	大島空利間切首里大屋字辞 令書	笠利氏家譜		為明	大島空利間切首 里大屋子	大島空利間切首 里大屋子	笠利氏家譜		太平洋戦争で 焼失
8	1569年	隆慶3年1月5日	鬼界島東間切阿伝のろ辞令 書	勇家旧蔵	喜界町阿伝	ゑくかたる*	大島姫内間切名 音定	鬼界島東間切阿 伝のろ		料紙	
9	1571年	隆慶5年6月11日	大島瀬戸内東間切阿木名目 指辞令書	吉久家文書	宇波村名柄	たらつ	大島空利間切名 音定	大島瀬戸内東間 切阿木名目指		料紙	
10	1572年	隆慶6年1月18日	大島姫内間切崎原目指辞令 書	吉久家文書	宇波村名柄	たらつ	大島瀬戸内東間 切阿木名目指	大島姫内間切崎 原目指		竹紙	
11	1572年	隆慶6年1月18日	大島姫内間切大屋字辞令書 (元禄8年差出した写本の写 の転写)	糸図文書写 永代家伝記 (和家文書)*	大和村大和浜	大樽金	大島空利間切天 和浜目指	大島瀬戸内東間 切大屋字	字宿大親家譜 糸図(和家文 書)	料紙	「長田(大和)須 藤文庫」架蔵和 原至氏所蔵文 書写真に原本 (今他の一部 (天辺)写る
12	1574年	万暦2年5月28日	大島瀬戸内西間切須古茂の たる箱地辞令書	須古茂文書	瀬戸内町須古 茂	たる	あかひどの子*			料紙	
13	1574年	万暦2年5月28日	大島瀬戸内西間切須古茂の 物たち箱地辞令書	須古茂文書	瀬戸内町須古 茂	物たち*	すこむのくちの うたり*			料紙	

25 奄美諸島編年史料編纂の成果と課題

◇	1574年	万暦2年5月28日	大島瀬戸内西間切須古茂の 宛たち給地録令書写(前次)	須古茂文書	瀬戸内町須古茂	宛たち*	すこむのくちの うなり*		栞紙 写本	13の後半部の 写本
14	○	1574年	万暦2年5月28日 大島瀬戸内西間切須古茂の い給地録令書(前次)	中田家文書	瀬戸内町古志	さかい				
15	○	1574年	万暦2年5月28日 大島瀬戸内西間切古志の葉船 地録令書(前後次)	中田家文書	瀬戸内町古志					
16	□	1579年	万暦7年5月5日 大島焼内間切部連大屋子 令書(延暦8年差出した写本 の写の転写)	系図文書写 永代家伝記 の写の転写)	大和村大和浜	天輝金	大島焼内間切 内大屋子	大島焼内間切 部連大屋子	宇宿大親家 系図(和家文 書)	「長田次郎」須 藤文庫、築城和 漢至氏所蔵文 書写真に原本 (今佚)の一部 (天辺右辺)写る
17	○	1579年	万暦7年10月1日 大島名瀬間切音里大屋子 令書	松岡家文書	奄美市名瀬佐 大屋		大島名瀬間切 音里大屋子	大島名瀬間切 音里大屋子		
18	○	1583年	万暦11年1月27日 大島焼内間切名榎のろ辞令 書	吉久家文書	宇後町名榎	つる*	もとのろのろの 子	大島焼内間切 名榎のろ		竹紙
19	○	1587年	万暦15年10月4日 大島名瀬間切大屋のろ辞令 書	大熊ト木屋文 書	奄美市名瀬大 屋	まくも*	もとのろのろの 子	大島名瀬間切 大屋のろ		栞紙
20	□	1588年	万暦16年5月27日 大島瀬戸内東間切音里大屋 子令書	密利氏家譜	為祿		大島密利間切 切音里大屋子	大島瀬戸内東 間切音里大屋子		栞紙 写本(印影、堅 長)
21	○	1594年	万暦22年9月28日 大島焼内間切屋純のろ辞令 書	吉野家文書	宇後村屋純	かなじらい*	もとのろのろの 子	大島焼内間切 屋純のろ		栞紙
22	○	1595年	万暦23年9月22日 大島瀬戸内西間切西庭辞令 書	須古茂文書	瀬戸内町須古 茂	いんほし	大佐事	大島瀬戸内西 間切		栞紙
23	○	1600年	万暦28年1月24日 徳之島西目間切手々のろ辞 令書	深見家文書	徳之島町手々	まな〜たる*	もとのろのろの 子	徳之島西目間 切		
24	○	1601年	万暦28年1月18日 大島焼内間切戸丸のろ辞令 書	戸丸集落系図 関連史料	大和村戸丸	あけるまい*	もとのろのろの 子	大島焼内間切 戸丸のろ		
25	○	1602年	万暦30年9月10日 大島瀬戸内西間切古志のろ 辞令書	中田家文書	瀬戸内町古志	まゐるまい*	もとのろのろの 子	大島瀬戸内西 間切古志のろ		
26	○	1603年	万暦31年10月17日 奥果島荒木間切荒木目指 屋令書	喜界文書	喜界町荒木	金樽金	荒木間切手久津 久焼	大島荒木間切 荒木目指	勝山家系図	栞紙 九州国立博物 館蔵
27	○	1606年	万暦34年11月28日 奥果島荒木間切手久津久 屋令書	喜界文書	喜界町荒木	金樽金	荒木間切荒木 目指	大島荒木間切 手久津久大屋子	勝山家系図	栞紙 九州国立博物 館蔵
28	◇	1607年	万暦35年閏6月6日 大島名瀬間切朝戸庭辞令書	大熊ト木屋文 書	奄美市名瀬大 屋	いしめまい	筆子	大島名瀬間切 朝戸庭		栞紙 写本(印影、堅 長)
29	◇	1609年	万暦37年2月11日 大島名瀬間切西里主辞令書	大熊ト木屋文 書	奄美市名瀬大 屋	いしめまい	大島名瀬間切 朝戸庭	大島名瀬間切 西里主		栞紙 写本(印影、堅 長)

注 (1)正本写本 ○:正本、◇:写本、□:系図、文書記載の写。(2)栞紙 富田正弘「琉球国送給文書と竹紙」『東京大学史料編纂所研究紀要』17号、2007年3月による。

文化』四一号、二〇一〇年三月）により紹介された一点を含め、奄美諸島に残る琉球国中山王詔書の一覧表（表2）の如く二九点（須古茂文書の、萬曆二年五月二十八日詔書正文の後半部の写本一点を除く）が確認されている。この点数は、沖縄県に残る一六〇九年以前の中山王詔書の数にせまる。

#### 4 城久遺跡群調査事業と赤木名城跡保存管理計画策定事業への参加

喜界町の城久遺跡群は、二〇〇二年度の畑地帯総合整備事業の事前の確認調査により発見された遺跡で、二〇一四年度まで発掘調査・遺物整理が継続して行われ、九世紀から十五世紀に及ぶ、九州と琉球諸島・中国大陆・朝鮮半島を結ぶ交易圏の拠点の遺跡と評価されている。私は、二〇〇七年二月に喜界町教育委員会に設置された城久遺跡群調査指導委員会に、熊本大学の甲元眞之先生（現、熊本大学名誉教授）、琉球大学の池田榮史氏、ラ・サール学園の永山修一氏と共に委員として参加する機会を得た。池田氏は鈴木靖民氏と共に城久遺跡群の重要性を提言され、城久遺跡群の歴史的性格を検討するため奄美市と喜界町で二〇〇七年二月一日・一日にシンポジウム「古代・中世の境界領域―キカイガシマの位置付けをめぐる―」が開催された。私もこのシンポジウムにコメンテーターとして参加した。シンポジウムの成果は、池田榮史編『古代中世の境界領域・キカイガシマの世界』（高志書院、二〇〇八年三月）として公刊された。私は、二〇一五年三月刊行の『城久遺跡群 総括報告書』（喜界町教育委員会。奈良文化財研究所データベース、PDF版公開）に、古代史の立場から、七世紀から十三世紀に至る編年史料を「城久遺跡群の歴史の評価の前提―日本古代・中世前期並行期喜界島編年史料集稿」として掲載する機会を得た。

奄美市笠利町赤木名（里・そとかねく外金久・なかかねく中金久）の街区の北に残る山城が赤木名城である。赤木名城は、笠利町教育委員会により一九九九―二〇〇三年度に調査され、報告書が刊行された。<sup>14</sup> 赤木名城跡は、笠利町教育委員会の調査成果

を引継いだ奄美市教育委員会により二〇〇七年度に国史跡指定の申請がなされ、二〇〇九年二月に国指定史跡として指定された。私は赤木名城について、史跡指定申請の際に作成された『赤木名城』（奄美市教育委員会、二〇〇八年三月。「電子ミュージアム奄美」、PDF版公開）に、甲元先生から依頼されて「赤木名城の時代背景」を掲載し、古琉球期のグスクとしての性格と併せて、日本の戦国時代並行期から近世初期の山城としての形状・機能も考慮すべきことを記した。奄美市教育委員会は、国指定史跡赤木名城跡の保存・整備・活用のために赤木名城保存管理計画を策定し文化庁に報告するため、二〇一三（二〇一四年度）に赤木名城保存管理計画策定委員会を設置したが、私はそこで委員長を務める機会を得た。奄美市教育委員会は、二〇一五年三月に『鹿児島県奄美市史跡赤木名城保存管理計画書』（「電子ミュージアム奄美」、PDF版公開）を文化庁に提出した。赤木名城跡は、山上に構築されていた古琉球期のグスク（城）が、琉球国の奄美諸島北端の統治拠点（鬼界島征討、倭寇対策、島津氏の侵攻への対策等）として十五〜十六世紀に整備・利用され、さらに一六〇九年に奄美諸島が鹿児島城主島津家の領地となり、笠利湾の湊（笠利湾東北部）に臨む赤木名地区（里・赤木名の集落）が大隅国・薩摩国の外城の如き城と麓からなる、笠利間切の統治拠点として整備された際に、山城も鹿児島藩によって現状のように再構築・整備された可能性がある」と私は推測している。赤木名地区は、前田川右岸（北側）に、代官所跡を含め、外城の麓の武家屋敷地区のような街区が形成され、街区の北西端の湊の海岸沿いには珊瑚石の防潮壁（現存する壁の一部に古い壁が残る）が設置されている。外洋船は湊に沖泊りし、小舟が前田川を遡航し代官所に往来することとなっていた。

## 三 奄美諸島編年史料編纂の試みと次の課題

## 1 『奄美諸島編年史料 古琉球期編』編纂

私は、「奄美群島編年史料集稿」と奄美諸島の慶長十八年知行目録・元和九年大嶋置目の検討を基に、一二六六年から一六二四年六月までを対象期間とした『奄美諸島編年史料 古琉球期編』の編纂を二〇一三年春から始めた。編纂・出版を企画したのは、前述の如く「奄美群島編年史料集稿」編纂以後に多くの新しい史料を知ったこと、「奄美群島編年史料集稿」は追補を繰返しており条文を年代順に整序する必要があったこと、「奄美遺産」における歴史遺産の一つの柱として編年体史料が必要であると考えたこと等による。『奄美諸島編年史料 古琉球期編』上は、大島が琉球国に入貢したとの伝承のある一二六六年から、島津軍が琉球侵攻の途上、奄美諸島を制圧した一六〇九年三月までの期間、同下は、島津軍が琉球国沖縄島に侵攻して琉球国中山王が降伏した一六〇九年四月から、鹿児島藩により奄美諸島の石高が定められた一二二四年六月までの期間を対象とした。『奄美諸島編年史料 古琉球期編』では、「奄美群島編年史料集稿」に加えて、奄美諸島に関わる記載に気付いた島津家文書中の奄美諸島関係の文書・記録、琉中・日中関係史料（『歴代宝案』・『日本一鑑』等）、新たに出現したまたは利用が可能となった奄美諸島史料（喜界文書、戸円のろ文書、奄美諸島の諸系図、「奄美群島歴史資料調査事業」の調査で利用可能となった史料等）、奄美諸島に関わる航路の記録のある明代の書（『順風相送』等）、ウィリアム・アダムズの航海記等のイギリス商館関係史料、さらに類聚として奄美諸島を描いた十六世紀中葉から十七世紀初期のヨーロッパの地図と「おもしろさうし」の奄美諸島関係おもしろを採録し、また上の補遺も下に収録した。上は、「刊行にあたって」・序・凡例・綱文一覧・本文の計四三六頁、下は、凡例・綱文一覧・本文（上の補遺・訂正、類聚を含む）・「あとがき」・史料索引の計九七〇頁と

なった。

次に、上に掲げた奄美諸島が描かれる中世の日本図に関わる條文の綱文を記す。ただし、條文に採録した史料の地図は、画像を掲載せず地名等の文字の掲出にとどめた。

一三〇六年四月十四日、千竈時家、所職及び所領ヲ子女ニ譲リ渡シ、嫡子千竈貞泰ニ口五島・わさの島・鬼界島・大島ヲ、次男千竈經家ニ沖永良部島ヲ、三男千竈熊夜又ニ七島ヲ、女子千竈ひめくまニ一期分トシテ徳之島ヲ與フ、

○稱名寺所藏日本圖等ニ、雨見嶋等ヲ記ス、

千竈文書、稱名寺所藏「日本圖」、妙本寺(千葉県銚南町)所藏「雜錄」所收「日本圖」

一四五三年四月二十四日、是ヨリ先、琉球國中山王尙金福、使者道安ヲ朝鮮國ニ遣シテ、大島笠利ニ得タル朝鮮國人ト麻寧等ヲ送還ス、是日、朝鮮國王端宗ニ拜謁ス、

○七月四日ヨリ先、琉球國中山王尙金福使者道安、朝鮮國王端宗ニ、日本琉球兩國地圖摸畫ヲ獻スルコト、

便宜合敘ス、道安ノ獻ジタル地圖ニ類セルモノニシテ、元祿九年、太宰府天滿宮ニ奉納セラレタル地圖、便宜左ニ掲グ、

沖繩県立博物館・美術館所藏「琉球國圖」

一四七一年十二月、朝鮮國議政府領議政申叔舟、朝鮮國王成宗ノ命ニ依リテ、海東諸國紀ヲ撰シ、海東諸國總圖及ビ琉球國之圖ヲ收メ、鬼界島・大島・度九島・小崎惠羅武島及ビ與論島ヲ描ク、

東京大学史料編纂所所藏「海東諸國紀」所收海東諸國總圖・日本國之圖・日本國西海道九州之圖・琉球國之圖・道路里數

下「類聚二 地圖」には、十六世紀中葉より十七世紀初期に西洋諸國・日本で描かれた地図(Diogo Homem)型地

圖、Abraham Ortelius型地圖、御朱印船航海圖）から、琉球諸島・奄美諸島等の島名を掲載した。

ウィリアム・アダムズ (William Adams、三浦接針。一五六四～一六二〇年。歿伝は『大日本史料』第十二編之三十三、元和六年四月二十四日第二條) は、イギリスの東インド会社が日本の平戸に設けた商館の貿易事業に参加し、東南アジアとの交易のための航海を五回行った。そのうち四回の航海記がオックスフォード大学ボドリアン図書館に残されている。<sup>(16)</sup> アダムズは、一六一四年一月にシヤムに向った第一回航海では大島に漂到し、次いで那覇に寄港し、平戸に帰還した。またアダムズは一六一八年三月春にコーチシナに向った第四回航海でも大島に漂到し、大島から平戸に帰還した。この二度の大島漂到の記録が、第一航海記と第三航海記に残されている。私はこれらの航海記と『日本關係海外史料』イギリス商館長日記原文編・譯文編<sup>(17)</sup>やイギリス商館関係書簡等<sup>(18)</sup>からアダムズの大島漂到の條を立て、英文史料の翻刻と翻訳を試みた。次に第一回航海における大島漂到の條の網文を掲げる。

一六一四年十二月二日、是ヨリ先、九月九日、幕府、暹邏國渡航ノ朱印ヲウィリアム・アダムズ<sup>三浦</sup>ニ下ス、尋  
 デ、イギリス商館長リチャード・コックス、ウィリアム・アダムズヲ船長トシテ、シー・アドヴェンチャー號ヲ  
 暹邏ニ遣スコトトシ、十一月十一日、シー・アドヴェンチャー號、肥前國松浦郡平戸ヲ出港シ暹邏ニ向ヒ、是  
 日、大島ニ著ス、

○十二月五日、ウィリアム・アダムズ、シー・アドヴェンチャー號ヲ以テ大島ヲ發シ、尋デ、同月七日、琉  
 球國那覇ニ著スルコト、及ビ一六一五年五月四日、ウィリアム・アダムズ、シー・アドヴェンチャー號ヲ以  
 テ那覇ヲ發シ、尋デ、同月二十四日、日本肥前國松浦郡平戸島河内ニ歸著スルコト、便宜合敘ス、

## 2 日本古代・中世前期並行期と寛永年間の奄美諸島編年史料

『奄美諸島編年史料 古琉球期編』の前後の時期の編年史料稿は、「城久遺跡群の歴史的評価の前提―日本古代・中世前期並行期喜界島編年史料集稿」（『城久遺跡群 総括報告書』）、「奄美群島編年史料集稿 寛永年間編」（『東京大学史料編纂所研究紀要』一七号、二〇〇七年三月。PDF版公開）として提示した。六〇七年から一二四三年までの條を収録した「日本古代・中世前期並行期喜界島編年史料集稿」では、山里純一氏の『古代日本と南島の交流』（吉川弘文館、一九九九年七月）、永山修一氏の「文献史学からみたキカイガシマ」（池田榮史氏編『古代中世の境界領域』）等の史料集成を参照した。なお、「奄美群島編年史料集稿 寛永年間編」に、石井正敏氏が「肥後守祐昌様琉球御渡海日記」<sup>19</sup>により、次の二條（網文・史料名・按文のみ掲出）を追加する。

寛永十五年（一六三八年・戊寅）十月二十二日、是ヨリ先、八月二十五日、鹿兒島城主島津光久、江戸ニ於テ、琉球國中山王尙豊へ島津家家督ヲ繼ギタルコトヲ告グ書ヲ製シ、中山王尙豊へ傳へムトス、仍リテ、十月五日、島津光久書狀ヲ中山王尙豊ニ傳へムガタメニ、光久ノ使者伊東祐昌・平田宗弘并ニ猪俣則康、薩摩國鹿兒島ヲ發シ、是日、祐昌等、大島瀬戸内西間切西古見ニ著ス、尋デ、祐昌等、十月二十三日、徳之島東間切秋徳ニ著シ、二十六日、秋徳ヲ發シ、二十七日、琉球國那覇湊ニ著シ、琉球在番奉行阿多内膳正并ニ金武王子朝貞ニ迎セラル、

〔肥後守祐昌様琉球御渡海日記〕○東京大学史料編纂所架藏木脇文書寫真帳、〔島津家文書〕御文書光久公卷六〇東京大学史料編纂所所藏島津家文書S島津家文書3-17-5・6寛永十五年八月二十五日島津光久書狀（琉球國中山王尙豊宛）・（寛永十五年）八月二十五日島津光久書狀（琉球國中山王尙豊宛）、〔舊記雜錄〕後



編卷九十四光久公 寛永十五年自三月至十二月○東京大学史料編纂所所藏S舊記雜録I-12/40後（『鹿兒島  
 県史料』旧記雜録後編五、卷九十四）、〔南聘紀考〕卷之下○東京大学史料編纂所所藏島津家本さ  
 I-12/33-64 寛永十五年是歳條

○十一月二日、鹿兒島城主島津光久ノ使者伊東祐昌等、首里城書院ニテ琉球國中山王尙豊ニ島津光久ノ書狀  
 ヲ呈スルコト、略ス、

寛永十六年（一六三九年・己卯）三月十六日、是ヨリ先、二月十一日、鹿兒島城主島津光久ノ使者伊東祐昌等、  
 首里城ニ於テ、中山王尙豊ノ島津光久書狀ヘノ返狀ヲ受ケ、日本薩摩國ニ還ラシメニ、首里城ヲ發シ浦添間切  
 牧湊ヲ經テ北谷間切北谷ニ至リ、二月十四日、今歸仁間切運天ニ著シ、是日、運天ヲ出デテ德之島東間切秋徳并  
 ニ同井之川ニ著ス、尋デ、三月二十一日、德之島ヲ出デテ、同月二十九日、大島名瀬間切名瀬ニ著シ、四月十一  
 日、名瀬ヲ出デテ、同十九日、薩摩國川邊郡坊津ニ歸著ス、

〔肥後守祐昌様琉球御渡海日記〕○東京大学史料編纂所架藏木脇文書寫眞帳

○四月六日、琉球在番奉行阿多内膳正ノ使者、大島名瀬ニ著スルコト、及ビ大島ニ麥こきニ來タル薩摩國指  
 宿郡山川ノ者一人ニ、平田宗弘ノ船ヘノ便乗ヲ許スコト、便宜合敘ス、

### 3 次の課題

日本古代・中世並行期の奄美諸島史研究には、奄美諸島の遺跡や出土遺物の年代を確認し、遺跡・遺物と文書・記  
 録史料から確定できる事象との関係の検討が必要である。二〇一六年一〇月に与路島の瀬戸内町立与路小中学校の校  
 内から「莊綱」の墨書がある白磁片が発見された。永山修一氏によって、「莊綱」墨書白磁片は十一世紀後半から

十二世紀の遺物と考えられる福岡市博多遺跡群出土の「莊□綱」と「莊綱」の墨書白磁片二点、大韓民国の馬島出土の「莊綱」「莊□」の文字のある陶磁器片三点と関わり、宋商人の貿易活動により奄美諸島へ齎された可能性が指摘された。<sup>(20)</sup> 与路島の「莊綱」墨書白磁片は、喜界島の城久遺跡群の出土遺物や、南島に広範囲に流布する徳之島のカムイヤキ陶器窯跡で作成された類須恵器と共に、十一世紀以降の奄美諸島における交易活動を示す。「莊綱」墨書白磁片や城久遺跡群等を、文書・記録等からわかる奄美諸島の古代・中世並行期の事象と関連付けることが課題となる。奄美諸島史研究、「奄美遺産」の記録・保存・活用において、民俗学・考古学の研究成果と史料との結合は重要な課題である。城久遺跡群、赤木名城、徳之島天城町の戸森線刻画遺跡、沖永良部島の古琉球期の墓（世之主の墓<sup>よのぬし</sup>）・グスク（内城等）、与論島の与論城や按司根津栄墓等の遺跡・史跡の調査・研究、祭祀儀礼研究、祭祀に関わるシマの唄などの集成・分析等を学び、それらの成果と史料研究から明かになることとの統合を試みる必要がある。

また、日本中世・近世初期並行期である琉球国統治期の奄美諸島の編年史料については、新出史料また追補すべき史料（墓碑銘等を含む）を確認し、さらに琉球国の編年史料総覧稿の編纂を試み、琉球国と奄美諸島の歴史を見直すことによって補訂していくことが必要である。十七世紀末から十八世紀前期の時期の奄美諸島では、元禄八（二六九五）年・宝永三（一七〇六）年における奄美諸島の間切役人層（由緒人、ユカリツチュ）からの文書・系図の鹿児島藩の記録所への提出、宝永年間の由緒人による身分確保のための鹿児島藩への上訴などが行われた。由緒人階層の笠利氏の佐文仁為辰（一六七八～一七六四年）は、田畑開発の功により享保十一（一七二六）年に代々外城衆中格（郷士格）を与えられ田畑姓を得た。十七世紀末から十八世紀前半期の時期は、奄美諸島の由緒人が身分の確立を求めて鹿児島藩と交渉する時期で、奄美諸島社会の転換期である。寛永年間の後、十七世紀中期から十八世紀前半

期までの奄美諸島編年史料は、十八世紀中葉以降のサトウキビ生産の大規模展開の時期の前史を知るためにも必要であり、松下志朗『近世奄美の支配と社会』や奄美諸島の市町村誌・史料集、また「奄美群島歴史資料調査事業」の成果に拠りながら、この時期の史料を整理し改めて学び直すことが必要である、と私は考えている。これらの課題は、東京にありかつ限りある身としては果し難いが、奄美諸島史研究にはこれからも機会があれば取り組んでみたいと考えている。

私は、日本史学と民俗学・考古学の融合が可能な國學院大學の研究環境が、奄美諸島史研究の今後の発展の基盤の一つとなることを期待している。また『奄美諸島編年史料 古琉球期編』の編纂過程で、國學院大學大学院の史学理論の講義で奄美諸島史料研究を論じる機会を得たこと、聴講された院生諸氏に謝意を表す。本稿は、二〇一九年六月一五日の国史学会大会における講演「奄美諸島編年史料編纂の成果と課題」を基に記した。講演の機会を与えられた国史学会、そして講演をお奨め下さった佐藤長門教授に謝意を表す。

### 注

- (1) 奄美諸島史研究の次第は、石上英一「奄美諸島史を学ぶ」(『史学雑誌』一一〇編三号、二〇〇一年三月。史学会編『歴史の風』、刀水書房、二〇〇七年一月、再録)・「歴史と素材」(『日本の時代史』三〇、吉川弘文館、二〇〇四年一月)・「枝葉と根幹―奄美史研究から―」(『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』七六号、二〇〇九年三月)・「奄美遺産から日本列島史を見直す」(『人文科学とコンピュータ研究会報告』2012-CH-93(9)、情報処理学会、二〇一二年一月)・「奄美群島編年史料集編纂の試み」(『沖繩研究ノート』二二号、宮城学院女子大学キリスト教文化研究所、二〇一三年三月)・「奄美諸島史から地域歴史文化遺産を考える」(『歴史学研究』九〇五号、二〇一三年五月)・「奄美諸島史を学ぶ」(『宮城歴史科学学研究』七四号、二〇一四年六月)・「刊行にあたって」(『奄美諸島編年史料 古琉球期編』上、吉川弘文館、二〇一四年六

- 月)・あとかぎ)〔奄美諸島編年史料 古琉球期編〕下、吉川弘文館、二〇一八年一月)等に記した。
- (2) 鈴木靖民「皇極紀朝鮮関係記事の基礎的研究」『国史学』八三号、一九七一年一月。
- (3) 増山太郎編著『聖徳太子奉讃会史』、永青文庫、二〇一〇年一月。
- (4) 石上英一「古代国家と対外関係」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史』二、東京大学出版会、一九八四年一月。同「古代東アジア地域と日本」『日本の社会史』一、岩波書店、一九八七年一月。
- (5) 石上英一『古代荘園史料の基礎的研究』上・下、塙書房、一九九七年二月。
- (6) 『マツノト遺跡』笠利町文化財報告第28集、笠利町教育委員会、二〇〇六年三月。奈良文化財研究所データベース、PDF版公開。
- (7) 安溪遊地・安溪貴子・弓削政己・今村規子「国立台湾大学図書館・田代安定文庫の奄美史料」『南島雑話』関連史料を中心に)『南島史学』八二号、二〇一四年二月。
- (8) 弓削政己「嘉永期大島古図(仮称)」(鹿児島県立図書館所蔵)の内容と作成の背景及び年代について(鹿児島県立図書館、K2984/301。二〇〇一年一月稿)。比嘉武則「琉球寫真景」再び」『名護博物館紀要 あじまあ』一〇号、二〇〇二年三月。「琉球寫真景」は『特別展絵巻「琉球寫真景」(名護博物館、一九九〇年二月)で公開された。
- (9) 鹿児島県立図書館所蔵「大島古図(カラー複写実物大)」(K2984)。附、DVD・R・CD・R版画像情報)。史料編纂所所蔵「大嶋古図」(レプリカ6647-1、探訪デジタル資料HDS2009-13)。
- (10) 石上英一「古奄美諸島社会史―一四―一六世紀の奄美―」『黎明館調査研究報告』一四集、鹿児島歴史資料センター黎明館、二〇一一年三月。
- (11) 石上英一「鹿児島県史料編纂と奄美諸島史料集成への期待」『黎明館調査研究報告』三二集別冊、二〇一九年三月。
- (12) 「奄美群島古文書群データベース構築事業」『鹿大ジャーナル』一六七号、二〇〇四年一月、PDF版公開。
- (13) 「伊仙町の文化遺産 伊仙町における奄美遺産悉皆調査報告書」(平成26年度文化庁文化芸術振興費補助金「文化遺産を活かした地域活性化事業」報告書、伊仙町地域文化遺産総合活性化実行委員会、二〇一五年三月。奈良文化財研究所データベース、PDF版公開。奄美諸島史料の史料群の構造分析の一事例は、石上英一「奄美諸島史料と文書の集合態・複合

- 態」(藤田勝久編『東アジアの資料学と情報伝達』、汲古書院、二〇一三年一月)に掲載した。
- (14) 笠利町歴史民俗資料館編『笠利町文化財報告』第26集・赤木名クスタ遺跡、笠利町教育委員会、二〇〇三年三月。奈良文化財研究所データベース、PDF版公開。
- (15) 石上英一「奄美諸島における慶長十八年知行目録」『黎明館調査研究報告』一八集、二〇〇五年三月。同「元和九年大嶋置目の諸本の再検討」『黎明館調査研究報告』一九集、二〇〇六年三月。
- (16) ウィリアム・アダムズの航海記の翻刻本、海野六夫『William Adamsの航海誌と書簡』(南海堂、一九七七年十二月)等参看。
- (17) 「イギリス商館長日記」原本、British Museum所蔵Western Manuscripts所収。
- (18) 「イギリス商館関係書簡」原本、British Library所蔵India Office Records所収。翻刻、Anthony Farrington, "The English factory in Japan, 1613-1623", vol.1.2. British Library, 1991。翻訳、岩生成一譯注『慶元イギリス書翰』改訂復刻版、巖松堂書店、一九六六年。
- (19) 「木脇文書」(東京大学史料編纂所架蔵写真帳「木脇文書」一、6171・97-33-1。鹿児島県鹿児島市、木脇家所蔵)。
- (20) 永山修一「出土文字資料二題」柴田博子編『古代日本における地域社会への文字文化の伝播と識字に関する研究』「日向国出土墨書土器集成・補遺(4)、薩摩国出土古代墨書土器集成・補遺(2)、大隅国出土古代墨書土器集成・補遺(1)」、二〇一八年六月。